

主体的に社会の形成に参画し、新たな時代を豊かに生きる生徒の育成

川上慎一郎 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

宮ヶ谷雄二 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

岩川朋之 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

原田高矩 [鹿児島大学教育学部附属中学校]

Fostering students to take the initiative in shaping society and lead satisfying lives in a new era

KAWAKAMI Shinichiro, MIYAGATANI Yuji, IWAKAWA Tomoyuki and HARADA Takanori

キーワード：社会的な見方・考え方、選択・判断、質問力、情報収集力、社会参画

1. 研究の概要

1.1 研究仮説

対話を生み出す学習課題を設定し、質問力と情報収集能力を高める指導の工夫を行えば、社会的な見方・考え方を働かせて考察・構想（選択・判断）することができ、主体的に社会の形成に参画し、新たな時代を豊かに生きる生徒を育成することができる。

1.2 研究の構想

本校社会科では、研究主題を「主体的に社会の形成に参画し、新たな時代を豊かに生きる生徒の育成—社会的な見方・考え方を働かせ、課題を追究したり解決したりする活動を通して—」とし、本校研究において育成をめざしている「Society5.0で求められる資質・能力」を明らかにしながら、研究・実践を進めてきた。社会科における「見方・考え方」とは、中央教育審議会の答申では、「社会科、地理歴史科、公民科の特質に応じた見方・考え方の総称であり、社会的現象等の意味や意義、特色や相互の関連を考察し、社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて構想したりする際の視点や方法である」とされている（表1）。本校社会科では、学習指導要領で各分野の特質に応じて整理された「社会的な見方・考え方」（視点や方法）を基に、生徒がその視点や方法を具体的な問い（質問、仮説など）の形に落とし込み、その問いについて答えを探究していくことが、「見方・考え方」を働かせた学びの姿と考えている。

表1 社会的な見方・考え方

地理的分野	歴史的分野	公民的分野
位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域	時期や年代、推移、比較、相互の関連、現在とのつながり	対立と合意、効率と公正、分業と交換、希少性、個人の尊重と法の支配、民主主義、協調、持続可能性

本校研究で示された「Society5.0で求められる資質・能力」を育成していくために、本校社会科においても、以下の三つの活動を充実させていく。まず、「読み解き・対話する活動」については、「読み解く」活動を社会的事象に関する諸資料から情報を取捨選択し、得た情報を社会的な見方・考え方を働かせて読み取る技能として捉え、また、「対話する活動」については、「対話」を異なる価値観をすりあわせる行為と定義した。次に、「思考・吟味する活動」については、社会的な見方・考え方を働かせながら、多面的・多角的に考察し、社会に見られる課題の解決に向けた広い視野からの構想（選択・判断）を行う活動と捉えている。最後に、「価値を見つけ・生み出す活動」については、生徒が課題解決に向けて他者と協働的に追究し、追究結果をまとめ、自分の学びを振り返ったり新たな問いを見いだしたりする活動として捉える。なお、この「対話する力」「質問力」「情報収集能力」は、社会的な見方・考え方を具体的に可視化することで、それぞれの力が育成され、同時に相互に高め合う作用があると考えられる。つまり、情報収集能力が高まれば、質問の内容が具体的になったり、対話が深まったりし、また、質問力が高まれば、さらに新たな資料を収集する必要性に迫られたり、対話のやりとりが増えたりするといったように作用すると考える（図1）。社会的な見方・考え方を可視化させ、「対話する力」「質問力」「情報収集能力」を育成するために三つの活動を充実させ、研究を進めていくことにした（図2）。

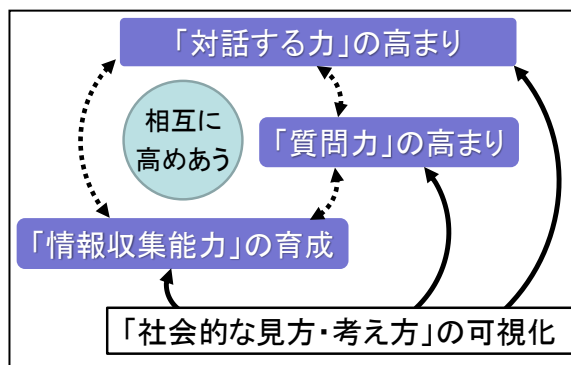


図1 社会科で育成したい資質・能力

1.3 研究の構想図

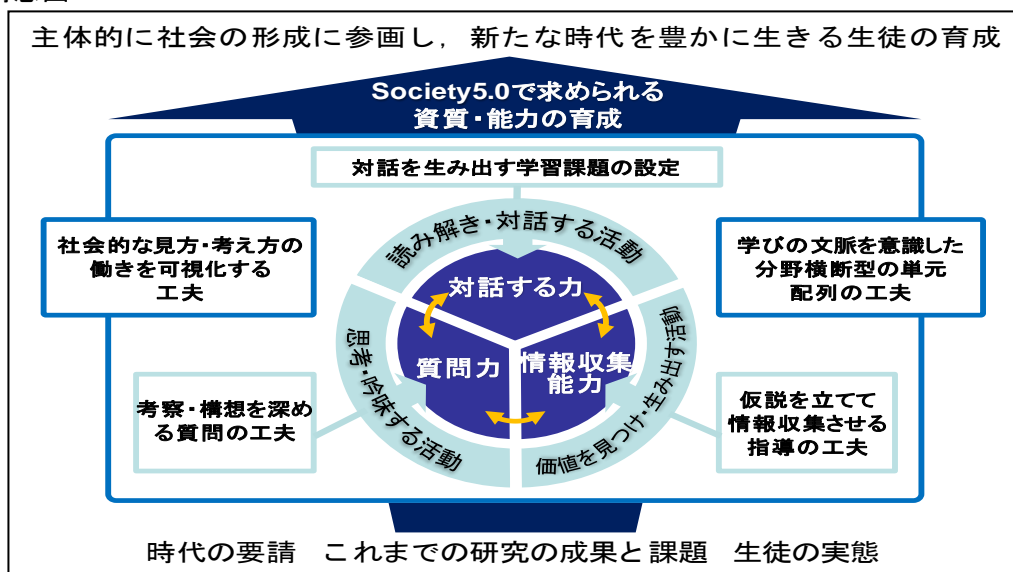


図2 本校社会科の研究の構想図

2. 今年度の主な取組

2.1 課題を追究したり、解決したりする学習活動の過程

本校社会科で育成を目指す「対話する力」「質問力」「情報収集能力」を高めるためには、前述の三つの活動が組み込まれた「課題を追究したり、解決したりする学習活動」を充実させる必要がある。また、社会的な見方・考え方を働かせて考察・構想させ、対話を促すことが大切である。本校社会科では、課題を追究したり、解決したりする活動を、下のような学習過程を取り入れて実践した（図3）。

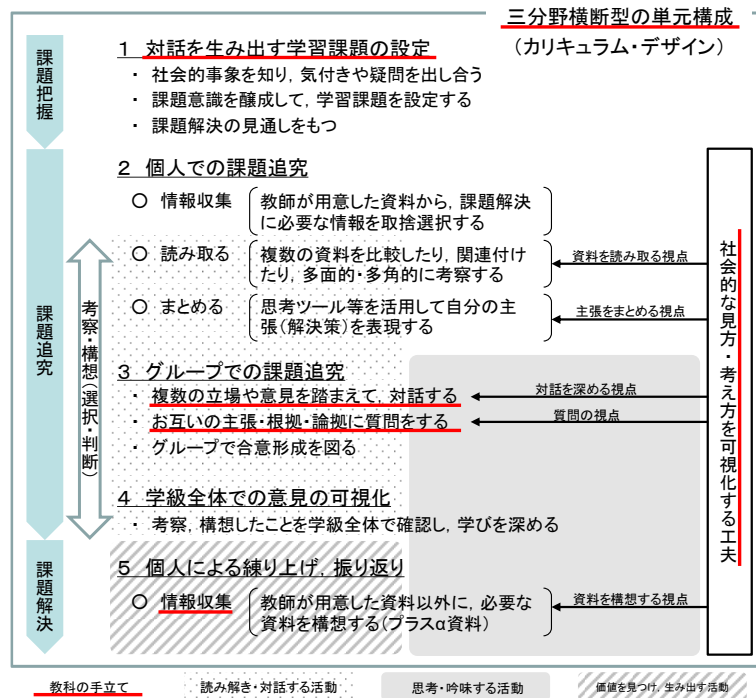


図3 課題を追究したり、解決したりする学習活動の例

2.2 学びの文脈を意識した分野横断型の単元構成

主体的に社会に参画しようとする態度を育むためには、社会に見られる課題を把握させ、その解決に向けて構想する力を養う必要がある。そのために、学習指導要領では「将来につながる現代的な諸課題を踏まえた教育内容の見直し」を図ることが必要であるとされている。そこで、本校社会科では、この現代的な諸課題を扱うには、地理・歴史・公民の分野を横断し、生徒の学びの文脈を大切に単元の再構成や配列変更を効果的に取り入れる必要があると考えた。

例えば、2年歴史「開国と近代日本の歩み」において、我が国の歴史に影響を与えた世界の歴史の扱いの一層の充実を図るため、日本史の背景として先に世界史を学ぶ従来の単元構成を、小学校で既に学習している開国という日本史の展開を学んでから、その背景を探る世界史を学ぶ

表2 単元構成の工夫

通常の単元構成	単元の再構成
1 近代革命の時代	1 開国と不平等条約
2 産業革命と19世紀のヨーロッパ	2 近代革命の時代
3 ロシアとアメリカの発展	3 産業革命と19世紀のヨーロッパ
4 ヨーロッパのアジア侵略	4 ロシアとアメリカの発展
5 開国と不平等条約	5 ヨーロッパのアジア侵略

よう単元の再構成を行って学習させ、世界の歴史を学ぶことへの意欲を高めさせることにした(表2)。そこで、単元を貫く学習課題を「なぜ日本は開国を迫られたか、なぜ他のアジア諸国と異なり欧米の支配を受けなかったのか」と設定し、社会的な見方・考え方を働かせ、追究したり解決したりする活動を取り入れた授業を展開していった。その際、地理的な見方・考え方を働かせることで、日本開国の原因や影響、世界史と日本史とのつながりをより意識して、授業を展開することができた。また、Society5.0で共通して求められる資質・能力を効果的に育成していくためには、教科や単元間の関連づけや構造化を図ることが重要である。そこで、本校社会科では、年間や教科の学習の見通しをわかりやすく示すような単元の構造図を作成している(図4)。図4は、2年歴史「欧米の進出と日本の開国」における、カリキュラム全体で単元の構造化を図るために単元の見通しを立てた構造図の例である。単元の構造図を作成することで「Society5.0で共通して求められる資質・能力」の育成や「対話を生み出す学習課題」の探究に適した単元との対応を整理することができる。また、他教科の教師と協働して構造図を作成することで、教科間の連携も図られ、教科を横断したカリキュラム・マネジメントにもつながっていく。なお、作成した単元の構造図は、年度末までに実態を踏まえて検討し直し、次年度に向けて改善すべき点を引き継ぐことも行っていく。

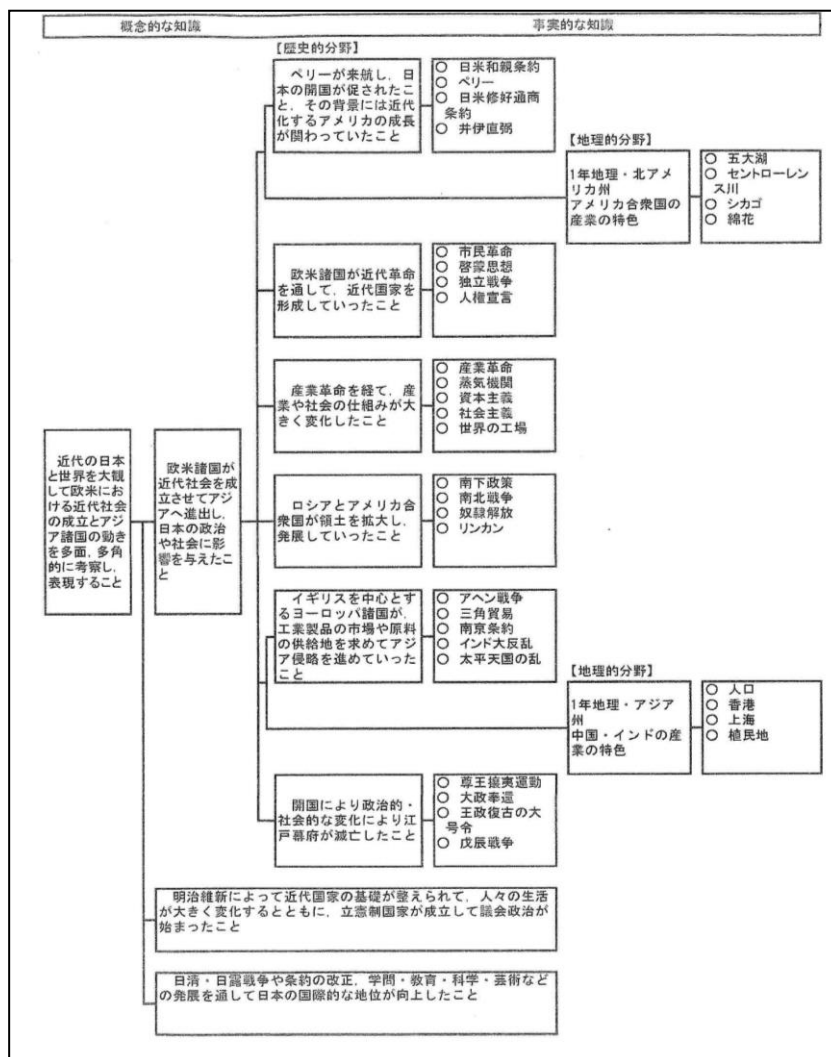


図4 2年地理「欧米の進出と日本の開国」単元の構造図

2.3 対話を生み出す学習課題の設定

変化の激しい現代社会において，今後生徒は他者と協働しながら「正解のない問題」に対応する力が求められると考える。そこで，将来につながる現代的な諸課題を踏まえて，他者と対話を積み重ね，協働して最適解を創らせるための学習課題を設定する必要があると考え，実践を積み重ねた(表3)。

表3 対話を生み出す学習課題の例

分野	学習課題
地理	イギリスのEU離脱について，賛成か，反対か。
	歴史的町並みや景観と住民の安全で便利な生活，どちらを優先するか。
	世界平和のための東アジア連合(日本を含む東アジアの国々との地域統合)について，賛成か，反対か。
歴史	家康，秀忠，家光のうち，もっとも影響力があった将軍は誰だろうか。
	自衛隊のPKO活動への参加について，賛成か，反対か。
	日ソ共同宣言を基礎に平和条約を締結することについて賛成か，反対か。
公民	日本は選挙の投票に行かなくても処罰されないが，オーストラリアでは罰金が科されることについて，どのように考えるか。
	これからの日本は，大きな政府を目指すべきか，小さな政府を目指すべきか。
	外国人労働者の受け入れについて，賛成か，反対か。

2.4 社会的な見方・考え方の働きを可視化する工夫

社会的な見方・考え方が働きやすいように工夫してワークシートを作成した。A3一枚のワークシート上に，空間的な見方，時間的な見方，相互関係の見方ができるような地図・年表・思考ツールを用意し，相互に関連付けさせながら学習に取り組めるように工夫した。

2.5 考察・構想を深める質問の工夫

これまでの授業において，ペアで意見を共有したり，グループで主張をまとめたりする際，生徒は互いに遠慮してしまい，当たり障りのない共通した内容で最大公約数的に小さく意見をまとめることが多く見られた。そこで，本校社会科では，社会科の見方・考え方を活用した表4のような視点を明確にした質問項目を生徒に提示することでグループ内での議論をより活性化させる手立てを取り入れた。生徒は，質問キーワードに7W1H(いつ when, どこで where, 誰が who, 何を what, なぜ why, どちら which, 誰の whose, どのように how)を組み合わせて使用する。例えば，生徒が「地域差」というキーワードを利用して質問する場合，「いつから地域差が見られるのか」「どこで地域差が見られるのか」「なぜ地域差が生まれるのか」「どのような地

表4 質問の視点

分野	視点	質問キーワード
地理	○位置や分布に関わる視点	規則性，類似，地域差など
	○場所に関わる視点	立地，民族性，共通性，多様性など
	○人間と自然の相互依存関係に関わる視点	環境依存，保全，防災・減災など
	○空間的相互依存作用に関わる視点	関係性，グローバル化など
	○地域に関わる視点	構造，格差，持続可能性など
歴史	○年代の基本に関わる視点	時期，年代，時代区分など
	○諸事象の推移や変化に関わる視点	変化，発展，時代の転換など
	○諸事象の特色に関わる視点	相違，共通性など
	○事象相互の関連に関わる視点	背景，原因，結果，関係性など
公民	○社会の在り方を捉える視点	対立と合意，効率と公正，幸福，寛容，個人の尊重，選択，配分，多様性など
	○社会に見られる課題の解決を構想する視点	民主主義，自由と権利，責任と義務，利便性と安全性，国際協調，持続可能性など

域差が見られるのか」といった質問が考えられる。相手の主張や新たに必要と考える資料について、7W1Hだけで質問してもよいが、社会的な見方・考え方を利用することでさらに思考が深まると考えた。なお、この質問キーワードは、自分の主張をさらに深めるための自己内問答としても活用できると考えている。社会科の見方・考え方を働かせて、他者や自己内での質問を活性化させることで、情報収集能力や対話する力の育成にもつながると考えた。

2.6 仮説を立てて情報収集させる指導の工夫

情報を収集する技能とは、手段を考えて課題解決に必要な社会的事象等に関する情報を収集する技能である。ただし、社会科の授業の中で、単元の計画上、生徒が実際に資料を収集する時間を設定することは難しい。そこで、生徒が授業の中で教師側が用意した資料を読み取り、思考・判断したことを表現させた後に、「他にどのような資料や情報がさらにあるとよいか」「この資料で提供されていない不十分な情報は何か」と仮説を立てさせ、必要な資料の内容を構想させる工夫を行うことにした。生徒は、教師から与えられた資料からだけでなく、自分に必要な資料を検討することを習慣化することで、資料を活用して課題解決に主体的に取り組み、情報収集能力の育成につながると考え、実践を積み重ねた。

2.7 本校社会科のグランドデザインの作成

各教科等でカリキュラム・マネジメントをすすめるとき、「何を学ぶか」という教育の内容と「何ができるようになるか」という育成を目指す資質・能力を指導のねらいとして明確に設定していくことが求められる。学習指導要領を読み解くことにより、教育の内容や、育成を目指す資質・能力を把握することはできるが、生徒や学校、地域の実態により各校が抱える課題は異なる。

これらの課題を踏まえた上で、社会科における指導を通して、学校の教育目標を達成することができるようにする必要がある。このような社会科の目標や課題、指導の手立てなどをまとめたものが「社会科のグランドデザイン」である(図5)。グランドデザインをつくることにより、学校の教育目標を意識した教科等指導の実践につながる。つまり、教育活動の質を高めたり、教科等の枠を超えた横断的・総合的な学習へと発展させたりすることができる。

【何ができるようになるか】												
(1) 「社会的な見方・考え方」を働かせて、概念等に関する知識を習得するとともに、情報を収集し読み取りまとめる技能を身に付けるようにする。 (2) 社会に見られる課題の解決に向けて、質問や対話により考察を深め、選択・判断する力を養う。 (3) よりよい社会の実現を視野に課題を解決しようとし、自国を愛し、他国や他国の文化を尊重しようとする態度を養う。												
【生徒の実態】						【目指す生徒の姿】						
<ul style="list-style-type: none"> 基礎的な知識を身に付けることはできるが、それを既得の知識と関連づけたり、組み合わせたりすることに課題がある。 整理された情報を読み取ることに慣れていないが、目的に応じて自ら資料を見つけ出し、関連付けることが苦手な生徒もいる。 授業で与えられた内容について考えることが出来ても、社会的事象に対して、「自分事」として関心をもち、関わり方を考えていくことに課題がある。 						<ul style="list-style-type: none"> 「社会的な見方・考え方」を働かせて、生きて働く知識を習得し、学習の基盤となる情報活用能力を身に付けている。 社会に見られる課題の解決に向けて、複数の立場や意見を踏まえて、選択・判断し、それを説明したり議論したりする力を身に付けている。 よりよい社会の実現を視野に主体的に学習に取り組む態度を身に付け、主権者として、持続可能な社会づくりに向かう社会参画意識をもっている。 						
【年間指導計画】												
社会	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
1年	世界の姿	世界各地の人々の生活と環境	古代までの日本			古代までの日本			世界の諸地域	地域の調査	中世の日本	
2年	近世の日本		日本の姿			日本の諸地域			開国と近代日本の歩み			
3年	二度の世界大戦と日本		現代の日本と世界		現代社会	個人の尊厳と日本憲法	現代の民主政治と社会	私たちの暮らしと健康	地球社会と私たち			
【実践するために何が必要か・どのように学ぶか】												
<ul style="list-style-type: none"> 課題を追究したり、解決したりする学習活動 → 社会的な見方・考え方を働かせて、質問や対話を行い、考察、選択・判断させる学習過程を取り入れる。 学びの文脈を意識した分野横断型の単元構成 → 主体的に社会に参画しようとする態度を育むために、社会に見られる課題を把握させ、その解決に向けて構想する力を養う。 						<ul style="list-style-type: none"> 仮説を立てて情報収集させる指導の工夫 → 生徒が授業の中で教師側が用意した資料を読み取り、思考・判断したことを表現させた後に、「他にどのような資料や情報がさらにあるとよいか」「この資料で提供されていない不十分な情報は何か」と仮説を立てさせ、必要な資料の内容を検討させる工夫を行う。 						

図5 本校社会科のグランドデザイン

2.7.1 【何ができるようになるか】

ここには、本校の教育目標と、中学校社会科学習指導要領に示される目標を踏まえた、本校社会科が設定した目標を記載した。「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の三つの柱に整理した本校の学校教育目標を踏まえながら、本校社会科の目標を設定した。

まず、知識及び技能については、『社会的な見方・考え方』を働かせることが、学校教育目標の「物事の本質を深く追究」させることにつながると考えた。社会科の三分野の授業を通して、生徒は「位置や空間的な広がり、時期や推移、対立と合意、効率と公正」といった社会的な見方・考え方を獲得することができる。生徒は、獲得した社会的な見方・考え方を働かせ、他教科や総合的な学習の時間等の学びと社会科の学びをつなげることで、深い学びを実現することができると思え、設定した。

次に、思考力・判断力・表現力等については、「質問や対話により考察を深め、選択・判断する力」を身に付けさせることが、学校教育目標の「よりよいものをつくり上げるために必要な力」を養うことにつながると考えた。社会科の授業において、諸資料を基に多面的・多角的に考察し、複数の意見や立場を踏まえて、社会の在り方や人間としての生き方について選択・判断する力を身に付ければ、生徒は社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくことができると考え、設定した。

最後に、学びに向かう力・人間性等については、「よりよい社会の実現を視野に課題を解決しよう」としていくことが、学校教育目標の「社会に参画していく態度」を養うことにつながる。また、「自国を愛し、他国や他国の文化を尊重しようとする態度」は、学校教育目標の「自尊感情ならびに他者を大切にする深い感情を育むこと」につながると考えた。社会科の授業を通して、自国の動向とグローバルな動向を横断的・相互的に捉え、地球規模の諸課題や地域課題を解決しようとする態度を育むことで、社会参画意識の涵養や自他の感情を大切にできる生徒の育成につながると考え、設定した。

2.7.2 【生徒の実態】・【目指す生徒の姿】

本校社会科から見る生徒の実態を簡潔にまとめた。さらに、本校社会科が目指す生徒の姿を簡条書きで記載した。【何ができるようになるか】と【生徒の実態】を踏まえ、「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」の視点から、生徒に達成させたい姿を整理した。

2.7.3 【何を学ぶか】

ここには、年間指導計画を記載した。社会科は、地歴公の大単元名を示している。これは、全教職員、とりわけ他教科の教職員が社会科のグランドデザインを見たときに、大単元名の方が社会的事象の名称よりも他教科や各学校行事との関連をイメージしやすく、横断的・統合的な指導を実践しやすいと考えたためである。

2.7.4 【実践するために何が必要か・どのように学ぶか】

ここには、本校社会科が現在、研究主題に基づいて取り組んでいる研究の内容を簡条書きで記載した。

3. 実践例

今年度の研究では、学びの文脈を意識した分野横断型の単元構成を手立ての重点として、授業づくりを行った。社会科の授業において、生徒たちは「歴史は歴史、地理は地理」と3つの分野の内容を別々に捉えるきらいがある。また、世界史の学習も日本史を理解するための学習として捉えがちである。そこで、現代社会（公民）を理解するための世界史、世界の地理を理解するための歴史といった視点から地理・歴史・公民の学習内容を精選し、生徒の学びの文脈を大切に単元の再構成や配列変更を効果的に取り入れた授業を行った（表5）。

表5 実践授業の単元と連携内容

実践授業	単元名	連携内容
授業1	「開国と近代日本の歩み」（2年歴史）	地・歴
授業2	「アジア州」（1年地理）	
授業3	「関東地方」（2年地理）	
授業4	「国際社会の仕組み」（3年公民）	歴・公

授業1では、近代日本の特色を深く追究させるために、従来の日本史の背景として先に世界の歴史を学ぶのではなく、日本史の展開を学んでからその背景を探って世界史を学ぶよう、単元の配列変更を行った。その際、地理的な見方・考え方を働かせることで日本開国の原因や影響、世界史と日本史とのつながりをより意識して、授業を展開することができた。**授業2**では、1年地理の「アジア州」において、アジアの経済成長について深く追究させるために、1年歴史的分野で学習した1～10世紀のアジアの歴史を扱う地歴連携授業を行った。歴史分野で学習した漢や唐と当時の西洋諸国とGDPを比較することで、アジアの経済成長に対する生徒の追究意欲を高めることができた。**授業3**では、2年地理の「関東地方」において、関東地方と他地域との結びつきを深く追究させるために、江戸幕府の成立など歴史学習と関連付けた単元構成にした。江戸城の位置を洪積台地と関連付け、地形的には日本で一番広い関東平野の中の、歴史的には江戸幕府の中心地として発達した東京を中心とする関東地方が、他地域とどのように結び付いているのかを理解させることができた。歴史的に見ても東京を中心とする関東地方が他地域と密接に結び付いてきたのかを、人口や産業、交通などの視点で捉えることができた。**授業4**では、3年公民の「国際社会の仕組み」において、国際社会における我が国の役割について深く追究させるために、1年地理・歴史的分野の学習内容を取り入れた授業を行った。現在の世界を取り巻く現状や、国際連合が作られた背景等学び直すことで、国際社会における日本のあるべき姿について追究意識を高めることができた。

なお、ここでは特に**授業1**を実践例として取り上げる。

3.1 単元名 「欧米の進出と日本の開国」

3.2 本時の目標

ア アメリカが日本に開国を迫った理由を、市場と原料供給地に着目して、様々な資料を相互に関連付けて考察し、表現させる。（思考力、判断力、表現力）

イ 単元を貫く学習課題に対して今後の学習の見通しをもって、意欲的に追究させる。

（学びに向かう力、人間性等）

3.3 指導に当たって

学習課題を「なぜアメリカは日本に開国を迫ったのか」と設定し，日本に開国を迫った理由をアメリカの視点で，当時の時代背景やアメリカ国内の社会構造に焦点を当てて，多面的・多角的に考察させていく。その際，単なる事実的な知識の獲得にとどまることのないよう，アメリカの捕鯨，工業，貿易に関する資料から読み取ったことを相互に関連付けて構造化させるようにする。そして，それぞれの事実的な知識を組み合わせ，近代社会を成立させた欧米諸国が交通網を整え，市場や原料供給地を求めてアジアへ進出していくという概念的な知識として獲得させたい（図6）。さらに，その他のヨーロッパ諸国はアメリカよりも先に近代社会を成立させて世界へ進出したこと，日本を含むアジア全体がその影響を強く受けていたことを理解させ，単元を貫く学習課題「日本はなぜ開国を迫られ，他のアジア諸国と異なり欧米諸国の支配を受けなかったのか」に迫っていく（図7）。

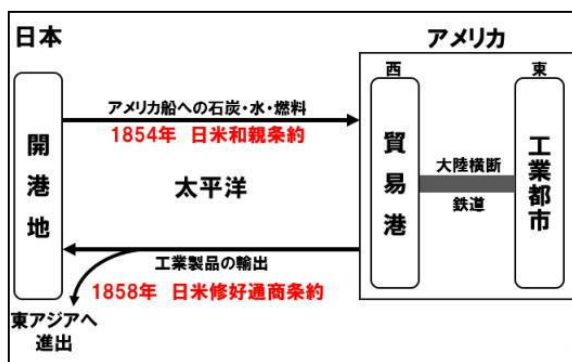


図6 アメリカのアジア進出

3.4 研究に関する指導の工夫

【手立て①】 社会的な見方・考え方の働きを可視化する工夫

【手立て②】 学びの文脈を意識した分野横断型の単元構成

3.5 本時の展開

主な発問や指示	欄	学 習 活 動	指 導 上 の 留 意 点	情報提示の方法と内容
<p><問題把握></p> <p>○ 狂歌からどのようなことに気付くだろうか。</p> <p>なぜアメリカは日本に開国を迫ったのだろうか。</p>	5分	<p>1 日本の開国について小學校で学んだことを思い出し，発表する。</p> <p>2 学習課題を設定する。</p>	<p>1 ペリー来航から和親条約を結んだこと，アメリカが日本開国に力を注いだことを確認する。</p> <p>2 アメリカが日本に開国を迫る理由に興味を持たせ，学習課題を設定する。</p>	<p>資料</p> <p>「上喜撰」狂歌 ペリー横浜上陸 ペリーの航路</p>
<p><本質究明></p> <p>○ なぜアメリカは日本に開国を迫ったのだろうか。</p> <p>○ アメリカが日本に開国を迫った理由を説明しよう。</p>	7分 13分	<p>3 アメリカが日本に開国を迫った理由を大統領の国書から読み取り，発表する。</p> <p>4 資料を基に個で開国の理由を考察し，ペアで意見を共有した後，班で意見をまとめ発表する。</p> <p>↓</p> <p>【思考力，判断力，表現力等】 アメリカが日本に開国を迫った理由を資料を基に考察し，表現している。</p>	<p>3 この当時のアメリカが漂流民の保護・通商・石炭を日本に求めたことを理解させる。</p> <p>4 資料分析をA・Bに分けてペアで分担させ，班内でそれぞれの分析内容を説明させる。それぞれ分析したことを関連付けて，アメリカの発展に関わる事象相互の関係を理解させる。【手立て①】</p>	<p>資料</p> <p>大統領の国書</p> <p>資料</p> <p>プリント1枚</p>

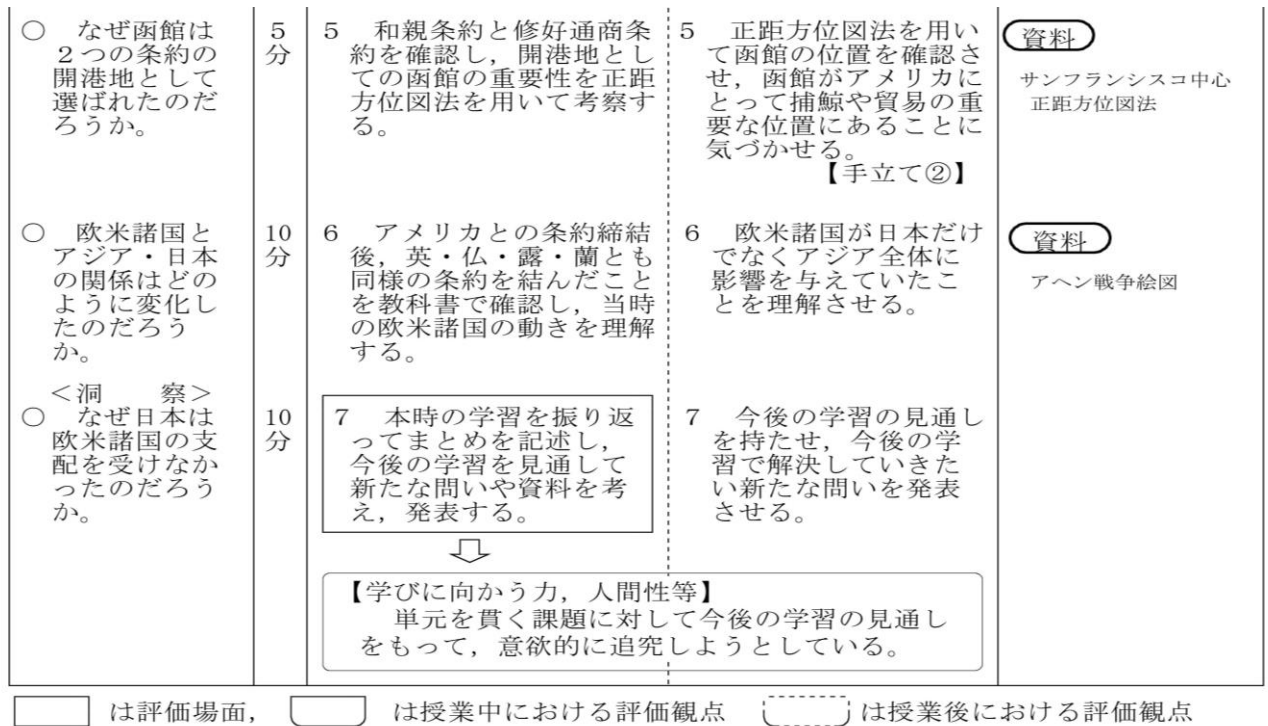


図7 本時の展開

4. 成果と課題

4.1 成果

- 仮説を立てて情報収集させることで、課題の解決にはどのような資料が必要かを検討する力の高まりが見られた。
- 社会的な見方・考え方の働きを可視化することで、既得の知識に加え、必要となる新たな知識・技能を習得し、それらを組み合わせ、活用しながら問題を解決していく力の高まりが見られた。

4.2 課題

- 必要な資料を社会科の授業のみで収集していくのは難しいため、分野横断型の授業から、総合的な学習の時間を見据えた、教科横断的な授業づくりに向けて、カリキュラム・マネジメントの工夫をしていく必要がある。
- 考察・構想したことを説明・議論する場面において、自分の意見を主張するばかりで異なる価値観をすりあわせることができないため、対話する力を身に付けさせる必要がある。

[引用及び参考文献]

- ・西岡加名恵編著 (2018)：見方・考え方を育てるパフォーマンス評価，明治図書
- ・原田智仁著 (2018)：社会の授業づくり，明治図書
- ・文部科学省 (2017)：中学校学習指導要領解説社会編
- ・文部科学省 (2017)：中学校学習指導要領解説総則編
- ・国立教育政策研究所 (2016)：資質・能力 理論編，東洋館出版社
- ・原田智仁編著 (2016)：社会科教育のルネサンス，保育出版社
- ・北川達夫・平田オリザ (2008)：ニッポンには対話がない，三省堂